

Feferman 集合論の超準化と Conservation Theorem

鹿児島大 理 河合 徹

箱根シンポジウム('80年3月)において, nonstandard analysis を展開することができ、その集合論的基礎付けとなつてゐる nonstandard set theory NST を提示した([1])。

一方 category theory では class や class の集まりを扱う必要があり、そのためのいろいろな方法が提案されている。ここでよそれらの中から Feferman の system ([2]) をとり、これと NST に基づいて超準化する。Nonstandard methods は category theory にも応用され始めたので、class やその集まりを含む nonstandard set theory を与えることを試みるわけである。

なお数理研の研究集会で発表したものに置換公理と正則性公理の代り(下記の公理 4)を付け加えて強化した形で公理系を述べる。

§1. Feferman の set theory $ZFC/m^{\text{主}}$

ZFC に constant symbol m を付け加える。

ZFC/m の公理は次の(1)~(5)である。

(1) ZFC の公理。

(2) $\exists x [x \in m]$.

(3) $\forall x \forall y [x \in y \wedge y \in m. \rightarrow x \in m]$.

(4) $\forall x \forall y [x \subset y \wedge y \in m. \rightarrow x \in m]$.

(5) Free variable x_1, \dots, x_n をもつ ZFC の formula Ψ に対して

$$\forall x_1, \dots, x_n \in m [\Psi^m(x_1, \dots, x_n) \equiv \Psi(x_1, \dots, x_n)]$$

ここで Ψ^m は Ψ の m への relativization である。

$a \in m$ は a が small set であることを意味する。

ZFC/m は ZFC の conservative extension である。([2] p.212).

§2. Theory NST/M

NST/M の nonlogical symbol は, predicate \in (membership relation) と constant S, I, M である。これらはそれぞれ次のことを意味する。

注. Feferman は[2]で ZFC/\subseteq と書いているが、ここでは S を別の記号として使用するので、混乱を避けるために ZFC/m と書くことにする。

$A \in S$ A is standard.

$A \in I$ A is internal.

$A \in M$ A is small set.

この節では ZFC/m の variable は小文字、NST/M の variable は大文字で表わすことにする。

主は ZFC/m の formula とする。主の variable を NST の variable または S, I の元を動く variable に置き換える、 m を M に置き換えてできる NST/M の formula をそれぞれ ${}^S\bar{\Psi}$, ${}^I\bar{\Psi}$, ${}^M\bar{\Psi}$ で表わす。

NST/M の公理は次の公理 1 から公理 9 までである。

公理 1. $M = S$.

公理 2. 主が ZFC/m の公理ならば主は NST/M の公理である。

公理 3. 主が正則性公理以外の ZFC の公理ならば主は NST/M の公理である。

公理 4. $\forall A [A \neq 0 \wedge A \cap I = 0 \rightarrow \exists x \in A [x \cap A = 0]]$.

公理 5. $S \subset I$.

公理 6. $\forall A \forall B [A \in B \wedge B \in I \rightarrow A \in I]$.

公理 7. Transfer principle.

Free variable x_1, \dots, x_n をもつ ZFC/m の formula $\bar{\Psi}(x_1, \dots, x_n)$

に対して

$$\forall x_1, \dots, x_n \in S [{}^S\bar{\Psi}(x_1, \dots, x_n) \equiv {}^I\bar{\Psi}(x_1, \dots, x_n)]$$

公理 8. Axiom of standardization.

$$\forall A [\exists T \in S [A \cap S \subseteq T] \rightarrow \exists B \in S \forall X \in S [X = A \equiv X = B]].$$

定義 K is finite $\equiv \exists A$ (standard natural number) $\exists F [F : A \rightarrow K, \text{onto}]$.

定義 D has S -size $\equiv \exists F [F : S \rightarrow D, \text{onto}]$.

公理 9. Axiom schema of saturation.

Free variable $x, b, x_1, \dots, x_n \in I \rightarrow \text{ZFC}/m$ の formula

$\#(a, b, x_1, \dots, x_n)$ に対して

$$\forall D (D \text{ has } S\text{-size}) \forall x_1, \dots, x_n \in I$$

$$\left[\begin{array}{l} \forall K \in I [K \text{ is finite} \wedge K \subseteq D \rightarrow \exists B \in I \forall A \in K \#(A, B, x_1, \dots, x_n)] \\ \rightarrow \exists B \in I \forall A \in D \cap I \#(A, B, x_1, \dots, x_n) \end{array} \right].$$

§ 3. conservation theorem

互が NST/M の定理ならば 互は ZFC/m の定理である。

とくに ZFC が無矛盾ならば ZFC/m は、したがって NST/M も無矛盾である。

この conservation theorem は NST/M の応用の根柢となるものである。

以下に conservation theorem の証明を示す。

NST/M の中で公理 2 が 互の s_1, \dots, s_n および公理 1, 公理 3~9 によつて 互が証明されたと仮定し、以下 ZFC/m において 互を証明する。

ZFC/mにおいて reflection principle によって 次のような存在集合 R が存在する。すなはち

$$m \in R,$$

$$\forall X \forall Y [X = Y \wedge Y \in R \rightarrow X \in R],$$

$$\forall X \forall Y [X \subset Y \wedge Y \in R \rightarrow X \in R],$$

$$(\text{並} \equiv \text{並}^R) \wedge \text{並}^R \wedge \dots \wedge \text{並}^R.$$

J は R のすべての有限部分集合の集合とし

$$t(f) = \{i \in J \mid f \subset i\} \quad (f \in J)$$

とおく。 $\{t(f) \mid f \in J\}$ は finite intersection property をもつから

$\{t(f) \mid f \in J\} \subset \gamma$ となる J 上の ultrafilter γ が存在する。^注

入は $\text{cf}(\lambda) > |R|$ なる limit ordinal とする。例えば $\lambda = 2^{\aleph_0}$ とすれば十分である。ここで $|R|$ は R の cardinal である。

$W_0 = R$, $\epsilon_0 = \{(a, b) \mid a, b \in R \wedge a \in b\}$, $m^0 = m$ とおき structure $w_0 = [W_0, \epsilon_0, m^0]$ を定義する。次に $\mu \leq \lambda$ なる μ に対して structure $w_\mu = [W_\mu, \epsilon_\mu, m^\mu]$ と $\lambda \leq \mu \leq \lambda$ なる λ, μ に対して injection $i_{\lambda}^\mu : W_\lambda \rightarrow W_\mu$ を超限帰納法で定義する。 $\lambda < \mu$ なる λ に対して w_λ と $\{i_{\lambda}^\mu\}_{\mu \leq \lambda}$ が定義されたとする。

注 この手は A. Robinson に基づいて釜江哲朗氏が enlargement を構成するために考えたものである。ここではその上の ultralimit により saturated model を構成するが、この方法は adequate ultralimit によるよりも簡単である。

successor ordinal $\mu = \omega + 1$ に対して

$\bar{W}_{\omega+1}$ は \bar{W}_ω の上上の ultrapower.

$k_{\omega+1}^{\omega+1}: \bar{W}_\omega \rightarrow \bar{W}_{\omega+1}$ は canonical embedding,

$P \in L$ なる P に対して $k_P^{\omega+1} = k_\omega^{\omega+1} \circ k_P^\omega$.

$k_{\omega+1}^{\omega+1}: \bar{W}_{\omega+1} \rightarrow \bar{W}_{\omega+1}$ は恒等写像.

と定義する.

μ が limit ordinal のとき $\langle (\bar{W}_\lambda)_{\lambda < \mu}, \{k_\lambda^\mu\}_{\lambda < \mu} \rangle$ の direct limit を $\langle \bar{W}_\mu, \{k_\lambda^\mu\}_{\lambda < \mu} \rangle$ とする.

$$\begin{array}{ccc} \bar{W}_P & \xrightarrow{k_P^\mu} & \bar{W}_\mu \\ & \searrow k_P^\omega & \downarrow k_\omega^\mu \\ & & \bar{W}_\mu \end{array}$$

$m^\mu = k_\omega^\mu(m)$ ($\omega < \mu$) とする. \bar{W}_μ 上の 2 項関係 E_μ は

$$\langle x, y \rangle \in E_\mu \text{ iff } \exists \lambda < \mu \exists a, b \in \bar{W}_\lambda [x = k_\lambda^\mu(a) \wedge y = k_\lambda^\mu(b) \wedge \langle a, b \rangle \in E_\lambda]$$

によって定義する. 以上で $\{\bar{W}_\mu\}_{\mu < \lambda}$ と $\{k_\lambda^\mu\}_{\lambda \leq \mu \leq \lambda}$ が定義され, $\lambda \leq \mu \leq \lambda$ ならば k_λ^μ は \bar{W}_λ から \bar{W}_μ への elementary embedding である.

$V_0 = \bar{W}_\lambda$, $E_0 = E_\lambda$, $m_0 = m^\lambda$ とおき, V_0 は structure $[V_0, E_0, m_0]$ すなわち \bar{W}_λ とする. R は transitive だが $\in V_0$ で extensionality が成り立つ, k_0^λ は \bar{W}_0 から V_0 への elementary embedding だが $\in V_0$ において extensionality が成り立つ.

すべての ordinal α に対して structure $V_\alpha = [V_\alpha, E_\alpha, m_\alpha]$ と $\beta \leq \alpha$ なるすべての ordinal の組 α, β に対して injection $P_\beta^\alpha: V_\beta \rightarrow V_\alpha$ を次のように定義する. $\beta < \alpha$ なる β に対して V_β と $\{P_r^\beta\}_{r \leq \beta}$ が定義されたと仮定する.

α が successor ordinal, $\alpha = \beta + 1$ のとき

$$V_{\beta+1} = P(V_\beta) \quad (\text{power set}),$$

$$p_{\beta+1}^{\beta+1}: V_{\beta+1} \rightarrow V_{\beta+1} \quad (\text{恒等像}),$$

$$p_\beta^{\beta+1}(a) = \{b \in V_\beta \mid \langle b, a \rangle \in e_\beta\} \quad (a \in V_\beta),$$

$$\gamma < \beta \text{ なら } \gamma \text{ に対して } p_\gamma^{\beta+1} = p_\beta^{\beta+1} \circ p_\gamma^\beta,$$

$$e_{\beta+1} = \{ \langle a, b \rangle \in V_{\beta+1} \times V_{\beta+1} \mid \exists c \in V_\beta [a = p_\beta^{\beta+1}(c) \wedge c \in b] \},$$

$$m_{\beta+1} = p_\beta^{\beta+1}(m_\beta)$$

と定義する。

α が limit のとき $\langle \{V_\beta\}_{\beta < \alpha}, \{p_\beta^\alpha\}_{\beta < \alpha} \rangle$ の direct limit を $\langle V_\alpha, \{p_\beta^\alpha\}_{\beta < \alpha} \rangle$ と定義する。また $p_\alpha^\alpha: V_\alpha \rightarrow V_\alpha$ は恒等像, $m_\alpha = p_\beta^\alpha(m_\beta)$ ($\beta < \alpha$) とする。 V_α 上の 2 項関係 e_α を

$$\langle x, y \rangle \in e_\alpha \iff \exists \beta < \alpha \exists a, b \in V_\beta [x = p_\beta^\alpha(a) \wedge y = p_\beta^\alpha(b) \wedge \langle a, b \rangle \in e_\beta]$$

と定義する。

以上のように超限帰納法によって $\{V_\alpha\}_\alpha$ と $\{p_\beta^\alpha\}_{\beta < \alpha}$ が定義され各 V_α は extensionality を満たす。

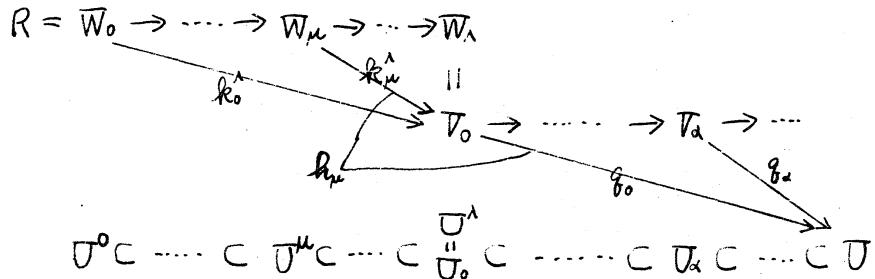
$$\beta \leq \alpha, a, b \in V_\beta \text{ に対して } \langle p_\beta^\alpha(a), p_\beta^\alpha(b) \rangle \in e_\alpha \equiv \langle a, b \rangle \in e_\beta$$

となる。

$\langle \{V_\alpha\}_\alpha, \{p_\beta^\alpha\}_{\beta < \alpha} \rangle$ の direct limit を $\langle U, \{g_\alpha\}_\alpha \rangle$ とする (U は class).

$U_\alpha = [U_\alpha, E_\alpha, M]$ と injection f_α によって $U_\alpha = [V_\alpha, e_\alpha, m_\alpha]$ に射影する structure とし, $E = \bigvee E_\alpha$ とおくことは U 上の 2 項関係(class)である。

$\mu = \lambda$ 存在 μ について $h\mu = g_0 \circ h\lambda$ とおき $\mathcal{U}^\mu = [D^\mu, E^\mu, M^\mu]$ は $h\mu$ によって W_μ に対する structure とする。このとき W_μ は \mathcal{U}^μ に isomorphic である。



$S = g_1(h_0^\lambda[R])$, $I = g_1(V_0)$, $M = h_0(m)$, $\mathcal{U} = [D, E, S, I, M]$ によって structure \mathcal{U} を定義する。

NSTのformula と structure \mathcal{U} によって解釈し、 \mathcal{U} において $\models_{\mathcal{U}}, \vdash_{\mathcal{U}}$, 公理1, 公理3~9 が成り立つことを確かめる。

$X \in D$ に対して $\langle X, S \rangle \in E$ と $X = D^0$ すなはち $\models_{\mathcal{U}}^R, \vdash_{\mathcal{U}}^R$ が成り立つから $\models_{\mathcal{U}}^R, \vdash_{\mathcal{U}}^R$ が得られる。

$A \in D$, $B \in D_{ext}$ とすれば

$$\langle A, B \rangle \in E \quad \text{iff} \quad A \in D_\alpha \wedge g_\alpha^{-1}(A) \in g_{ext}^{-1}(B).$$

これから \mathcal{U} が公理3~6 を満たすことが証明される。

公理1 は $m \in R$ から、公理7 は \mathcal{U}_0 が \mathcal{U}^0 の elementary extension であることから、公理8 は R の元の部分集合は R の元であることからすべてして成り立つことがわかる。

最後に公理9を確かめる。 $D \subset D_0$, $F: D^0 \rightarrow D$ (onto), $x_1, \dots, x_n \in D_0$ と仮定する。

$|D| \leq |D^c| = |\Gamma| < cf(\lambda)$, $D \subset D_0 = \bigcup_{\tau \in \lambda} D^\tau$ だから

$\tau < \lambda$, $D \subset D^\tau$, $x_1, \dots, x_n \in D^\tau$

なる ordinal τ が取れる. $j \in J$ とすると $j = \{y_1, \dots, y_n\} \subset R$.

$U^j \models (\exists b) [\nexists [F(h_0(y_1), b, x_1, \dots, x_n)] \wedge \dots \wedge \nexists [F(h_0(y_n), b, x_1, \dots, x_n)]]$.

U^j は U^τ の elementary extension で

$F(h_0(y_1), \dots, F(h_0(y_n)), x_1, \dots, x_n \in D^\tau$

だから同じこと $\# U^\tau$ で成り立つ. したがって $b \in W_t^\tau$ が存在

して

$j \in J$, $y \in j$ ならば $U^\tau \models \nexists [F(h_0(y), h_\tau(b), x_1, \dots, x_n)]$.

$A \in D$ とする. $A = F(h_0(y))$ なら $y \in R$ とすると

$t(\{y\}) \subset \{j \in J \mid U^\tau \models \nexists [F(h_0(y)), h_\tau(b), x_1, \dots, x_n]\}$.

左辺は ultrafilter 子に属すから 右辺も子に属し, κ の定理に

よって $U^\tau \models \nexists [A, h_\tau(b), x_1, \dots, x_n]$.

ゆえに U^j すなわち U_0 において同じことが成り立ち, 公理 9 が確かめられた.

以上のように U において $\nexists \#$, $\#_e$, 公理 1, 公理 3~9 が成り立つから $U \models \nexists \#$. したがって $\nexists \#$. これから $\#$ が得られる. これは ZFC/m における $\#$ の証明を $\#$ と之, conservation theorem が証明された.

文 獻

- [1] Kawai, T. ; Axiom systems of nonstandard set theory,
to appear.
- [2] Feferman, S. ; Set-theoretical foundations of category
theory (with an appendix by G. Kreisel), Reports of
the Midwest Category Seminar III, Lecture Notes in
Math. 106, Springer 1969, pp. 201 - 247.